

新宗教における教団内聖地の確立過程

森岡 清美

目次

- 一 聖地団参の意味と本稿の目的
 - 二 初期佼成会における聖地団参
 - 三 初期聖地団参の実態
 - 四 団参聖地の変化
 - 五 教団内聖地の確立
 - 六 総括
- 注

一 聖地団参の意味と本稿の目的

聖地団参とは、聖地への集団参詣のことである。星野英紀は、遠隔の聖地参詣をすべて巡礼とよび、これを集団的に行なうものと個人的に行なうものとに分けて⁽¹⁾いる。この分類に従えば、いうまでもなく集団巡礼が聖地団参にあたる。また、新城常三のいう「社寺参詣」の社寺とは、聖地の一型態である⁽²⁾。聖地には社寺などの宗教施設を中心とするもののほか、山岳や河川など宗教的自然を挙げる事ができる。したがって、聖地団参は集団的社寺参詣よりも広い概念である。

では、聖地団参は集団巡礼と同義かという点、そうでもない。星野によれば、集団巡礼には、おおむね各ムラ単位につくられた参詣講によるものと、各宗各派の本山詣・本部詣とがある⁽³⁾。前者は地域で編成され、その参加者は地域的に集中するが、後者は、地域の寺などを核として組織されるにせよ、参加者の分布は比較的拡散している。また前者では参詣を受け容れる社寺側の調整的役割がどちらかといえは受動的であるのに対し、後者ではそれが積極的であり、参詣を動員し組織する上で主導的であることがある。また、前者では春の農耕開始前とか秋の収穫後とか、参詣講員側の便宜に従って日程が決定されるが、後者では本山・本部の記念日に照準して参詣日程が決定される。聖地団参とは、集団巡礼のうち後者、つまり集団的な本山詣や本部詣のことである。

星野は巡礼の目的として、まず信仰上の目的を挙げ、修行のため、死者供養のため、あるいは病氣平癒など現世利益のため、といった目的を指摘している。つぎに、観光・遊楽のため、といった、巡礼の大衆化による派生的な目的を掲げている。そして集団巡礼の場合、これを組織する側には、集団の親睦をはかる、あるいは同信共同体の連帯を培うため、といった目的が上記のものにつけ加わる、としている⁽⁴⁾。集団巡礼のなかでも、参詣講によるものには観光・遊楽目的が比較的前面に出やすく、本山詣・本部詣においてはどちらかといえば信仰上の目的が卓越する、とみてよいだろう。すなわち、本山詣・本部詣という形態での集団巡礼、つまり本稿でいう聖地団参では、信仰上の目的が卓越し、かつ同信共同体の連帯強化が意図されているといえよう。

星野はまた、V・ターナーの所説に依拠して、日常の世界は地位・役割によって組み立てられた「構造」の世界であるのに対し、宗教の世界とくに巡礼の世界は、日常の地位・役割からの離脱を可能にするゆえに、「反構造的」であり、真にトータルな人間同士の触れあいを実現するコミュニティの世界である、という。反構造の世界は本来一時的なものである。存続のためには宗教の世界も日常化され構造化されねばならず、そこに必然的に生々しかるべき宗教性の枯渇が生じる。かくて再び巡礼によって反構造の世界が回復されなければならない。巡礼によって回復されるコミュニティは、自然発生的コミュニティではなく、またイデオロギー時コミュニティでもなく、日常生活のなかにくみこまれ制度化された規範的コミュニティである。ともあれ、巡礼がもたらすコミュニティにおいて、人は世間の階級的

性年齢的差別から解き放たれ、真に自由で平等な人間同士の触れあいを実現し、人間としての連帯感を始めとして、日常生活ではもちえない体験を味わう、と説いている。⁽⁵⁾

これは巡礼の（潜在的）機能の一般論であるが、コムニタスをもたらすものとしての巡礼に二つの位相が区別されることを示唆している。第一の位相は、日常的な構造の世俗世界から非日常的な反構造の世界へ導き出す巡礼である。巡礼が終れば、コムニタスの体験をへたが故の変化を遺してではあるが、日常の世界に還帰する。第二の位相とは、日常化され構造化された宗教の世界から、宗教の原体験へ人を導き入れる巡礼である。巡礼がすめば、コムニタスの体験によって活性化された宗教性をいだいて日常的な宗教の世界に復帰する。前者はいわば一時的出家ともいべき巡礼であり、後者は一時的隠遁ともいべき巡礼である。集団巡礼の二類型のなかでは、参詣講によるものは、比較的多く前者と、本山詣・本部詣は比較的多く後者と結合しているといえよう。

個人巡礼においても、多種多様な人々が集まるなかで体験されるコムニタスは、人々に人間同士の連帯感を味わわせる。集団巡礼では、その集団内に限られやすいにしても、旅を共にすることによって、ふだん体験しなかった深さの連帯感を味わう。聖地団参ではなおさらである。のみならず、聖地団参の母体である宗教団体そのもののコムニタス性を、団参によって回復し、補強することが企図されている、といってもよいだろう。

本稿は、上記のような聖地団参の概念を手がかりとして、団参目標である聖地がどのように確立し

てゆくかを、その過程をとらえやすい新宗教について考察しようとするものである。既成宗教においては、聖地確立過程の記憶を再構成することはおおむね容易ではないが、新宗教ではそれは眼前の事実であるから、克明にその過程を追跡することができるはずである。

本稿では、新宗教のなかから、立正佼成会（以下佼成会と略称）を選んだ。法華経を所依の經典とする靈友会系新宗教の一つ佼成会は、昭和十三年三月に結成され、第二次大戦後の一〇年間で急成長を遂げて現代日本を代表する大教団の列に加わった。佼成会では、はじめ教団の外に聖地を求めたが、やがて教団外聖地への依存から脱して、教団のなかに聖地を確立していった。それが新宗教における聖地確立過程の有力な一型態と考えられるので、ここにその過程を明らかにしておきたい。聖地確立は教団確立の一側面にほかならないから、本稿は聖地を手がかりとする教団確立過程の分析といってもよい。しかしあわせて聖地団参の考察となり、ひいては現代史における社寺参詣の研究につながることを庶幾するものである。

二 初期佼成会における聖地団参

佼成会草創期の聖地は、母体である大日本靈友会での慣行を承継して、身延・七面山であり、日蓮誕生の地小湊誕生寺であった。身延久遠寺は日蓮墳墓の靈地である。七面山は春秋の彼岸には富士の

頂上からの来光を拝ぐことで古くから知られ、加えて法華経行者守護の七面大明神鎮座の聖域と信ぜられてきた修行の霊山である。佼成会が身延・七面山に最初の団参を決行したのは、創立二年後の昭和十五年九月のことで、参加者は創立者の庭野日敬・長沼妙佼を含めて、僅か一九名だった。翌十六年秋も十月七日に身延・七面山へ団参し、戦争中も毎年小規模ながら団参がくり返された。小湊誕生寺への団参は十七年二月十六日が最初だった。⁽⁶⁾

団参を率いた庭野日敬は、後年『自伝』のなかで団参についてつぎのように語っている。

草創時代には、春は小湊の誕生寺から清澄山、秋は身延の久遠寺から七面山、そして九月には鎌倉の龍口寺への参拝が年中行事のようになっていた。中でも七面山参拝がもっともひんぱんに行なわれ、一時期には一年に何回もお参りに行ったものである。

お山参拝(7)と言っても、だれでもが参加できたわけではない。修行の段階があるところまでいっていないのはだめなのである。

お参りの人選にはいった人は、まず二日間、魚類・肉類・卵・牛乳の類を食べず、精進潔斎する。味噌汁のダシのカツオブシさえ忌むのである。それどころか、日常使っている鍋にはそうした不浄が染みついていて、新しい鍋を買って使った。それで、「お山へ行くたびに鍋がふえる」と、よく言ったものだ。

出発の一週間前から水行をする。前の晩から水を汲んでおくのだが、その器も四斗樽などを塩でゴシゴシ洗って清めたもので、いつも洗濯をしているタライなどを使うと、ときめんに何か「お悟り」⁽⁸⁾を頂戴した。

着用する白衣には、私がいちいち墨でお題目を書いたものだが、その一枚ごとに新しい水を入れたコップをご宝前に供えておく。すると、精進を怠った人や心がけのよくない人の時は、コップの水にぶくぶく泡が生ずるのだ。そんな人には、「あなたは今度はため」と、参拝を中止させた。それほど厳しい潔斎をするようになったのは、第一回の時に大変な「お悟り」⁽⁹⁾をいただいたからである。

右の記述には、団参に先立っての、日常的世界からの脱却のための儀礼が語られている。三週間にわたる精進と直前一週間の水行がそれである。つぎにいよいよ出発の朝がきて、ふだんは着用しない白衣を身に着け、白い手甲・脚絆・足袋、それに草鞋をはき、頭陀袋をかけ、六角の金剛杖をもてば、非日常的世界に足を踏み入れることになる。白づくめの装束の中心はやはり白衣であって、その背には庭野がいちいち南無妙法蓮華経の題目を書き、神しんいれをしてあるから、参拝者は題目を背負う形となる。非日常的世界とは、題目を背負い、題目と一体となる世界であることを、白衣が象徴している。しかも、七面山に登るとき、南無・妙・法・蓮・華・経と唱えながら登るのである。登山の一步一歩⁽¹⁰⁾

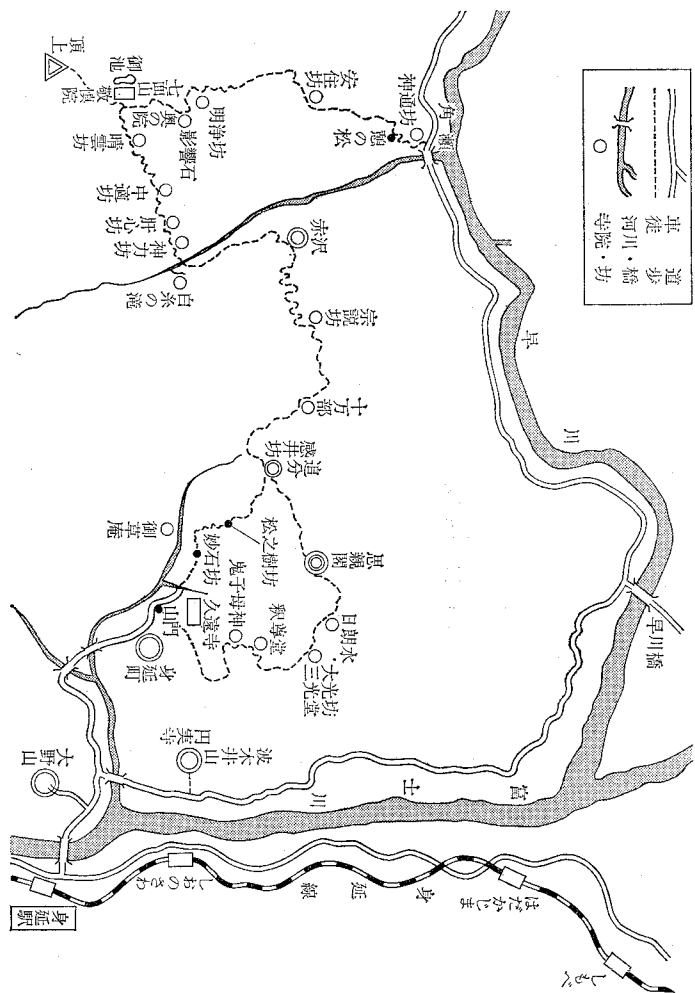


図1 身延山附近要図 (昭和35年頃)

が、題目と一体化する歩みに外ならない。

昭和十五年の第一回お山参拜の時、身延到着の日のうちに久遠寺へ参詣し、その夜は田中屋旅館で泊った。翌朝三時に起きて出発、奥の院思親閣をまわって追分へ出、赤沢で昼食をとり、それから七面山へ登った。約七里の旧コースである。庭野は『自伝』のなかでつぎのように語っている。

その夜は宿坊に泊まり、翌朝早く見晴らし台へ出、靈感修行をした。みんな砂利の上になすわり、東の方へ向いて朗々と読経する。山の靈氣に心身共に引き締まって、何ともいえない気持だ。そうするうちに、東方の靈峰・富士の頂上の雲の際が赤々と染まってくる。次第次第に色が変わり、金色に輝き始める。と見るうちに、そこからパツと矢のような光芒を放ちつつ太陽が姿を現わす。その瞬間、修行する者の感激と歓喜は絶頂に達するのだ。それが春秋の彼岸には真の頂上から上がるから、その美しさといったらない。⁽¹²⁾

富士の山頂に仰ぐ来光こそ七面山登山のクライマックスであり、苦しい登山が象徴する死とそれからの再生が体験されるのである。

昭和十六年十月の身延・七面山団参の写真をみると、五〇人余りの行者姿の一行が旗を先頭に二列縦隊で山道を進んでいる。⁽¹³⁾ 旗は、十五年春、神示によって作製することになり、中央に南無妙法蓮華

經、その右に天壤無窮、左に異体同心と庭野が染筆し、正式には同年四月五日、佼成会の本尊として勧請したものである。⁽¹³⁾ 旗は「御旗」と尊称される。御旗を勧請することは、靈友会の觀念によれば、妙法広宣流布の単位体としての地歩を獲得したことを意味する。御旗が勧請された年の秋、最初の身延・七面山団参が決行され、御旗を先頭に登拝したのであった。

団参の目的は修行であつた。団参を修行ととらえうる信者、団参に先立って精進潔斎を怠りなく励行できる信者だけが団参を許され、物見遊山的な気持ちで参加する人はきびしく排除された。日蓮ゆかりの靈地、山岳修行の靈山で、聖なるもの・靈なるものにふれ、日常生活では味わえない体験をする修行が、団参であつた。

個人参拝でも、聖地・靈山に登拝することにより、非日常的世界に参入し、靈力を培って日常生活に復帰することができよう。しかし、団参の機能はそれにとどまらなかった。庭野は『自伝』のなかで、初期の団参を回想してつぎのように述べている。

小湊から清澄山、身延から七面山というこの団体参拝は、たんに信仰的に大きな感銘を受けただけでなく、僧伽の結束を固めるうえでも、また社会人としての修養を積むうえでも、多大の効果があつた。

身体の弱い人や年寄りの人がいると、その人の荷物（主食が配給制になっていたのでみんな米まで

持参したを背負ってあげる、へたばった人は肩につかまらせて登らせる、あるいは綱をつけて引つ張る、杖で後ろから押す……という具合に、みんなが助け合う気持になった。自然にそうなってしまうのだった。

また、汽車の中では、——たいいてい幾車輛かを借り切っていたが——けっして高声を出して騒ぐことなどせず、お経をあげ、法座を開いて静かに語り合っていた。弁当のからや紙くずなどを散らかすようなことは絶対にしなかった。それどころか、下車する前には必ず列車中をきれいに掃除しておいた。旅館に着いても、お客づらをしてはいけないというわけで、食事の後片づけ、布団の上げ下ろし、部屋の掃除など、全部こちらでやった。便所もきれいに掃除しておいた。

信者にとって、じつにいい修養だった。また、旅館の人はもちろん、伝え聞いた町の人びとも好感以上のものを覚えたらしく、身延の町から入会者が続出した。旅館や土産物店の人はほとんど全部入会した。⁽¹⁴⁾

佼成会の内部においては、助け合いが自然に励行されて結束が強まり、佼成会と一般社会の接点では、乗物のなかでも、旅館でも、また土産物店においても、「お客づらをしない」という基本的な姿勢から、世間の人の目を見はらせる行動が展開され、信者にとっては社会人としての修養を積むことになったのである。これは、佼成会の団参の慣行であったが、また、日常的な地位・役割によって構

造化された世界を出て、平等で自由なコムニタスの世界を経験したことの、集団的効果といってもよいだろう。

三 初期聖地団参の実態

ここで初期というのは、とくに聖地団参に関連して初期というのは、昭和二十八年頃までを指している。昭和十五年九月の第一回身延・七面山参拝から、昭和三十三年に至る聖地団参を一覧にした表1をみよ。だいたい同時代の記録や写真によって確認しうるのであって、昭和二十三年八月以降は網羅的であるが、それ以前については脱漏が予想され、戦中・戦争直後でも、少なくとも毎年一回は身延・七面山への登拝を行なったものと考えられる。それを補完しえたとしても大綱には変りはない。昭和二十四年から二十八年までは団参回数が多く、また二泊三日以上の長い日程の団参を含んでいるが、二十九年以降は回数が年四回以下に急減し、二泊三日にわたる団参は姿を消す。しかも、身延山中心の団参から小湊誕生寺中心のものへの推移が、この間に認められる。そこで、昭和二十八年までの団参を初期団参とし、それ以後の団参と区別して取扱うことは、団参に生じたと考えられる変化を析出するために必要であり、また意味のあることである。前項での庭野の回想も、このような時間幅をもった初期団参の姿をあらわにするものであった。

校成会は、会員世帯数一千くらいの規模で敗戦を迎えたが、戦後、生活の具体的指針を求める人々の希求にアピールして、急速な会員増をみた。昭和二十三年の初めにはほぼ一万に達し、会員を収容しうる広い新道場の建設が日程に上されていた。その年の八月一日、かような状況のなかで宗教法人令によって宗教法人となり、将来の発展に備えた。これを機として、『日報』とよばれる庶務日記と、法人の議決機関としての総代会の議事録が書き遺され始めた。まず、両者から昭和二十三年と二十四年早々の団参の実態を探ってみることにしよう。

二十三年八月、身延山代表参拝

今回の代表参拝は、八月一日をもって立正佼成会が宗教法人となったことへの、お礼詣りとみなすことができる。大事をすませたのち、なるべく早く身延山にお礼詣りに行くのが、当時の不文律⁽¹⁵⁾だった。八月五日、第一回総代会を開き、翌六日法人役員に辞令を渡して、七日に身延へ登ったのである。

二十三年十月、七面山に丹前七〇枚奉納

七面山宿坊で登拝者の宿泊に用いる丹前である。八月の代表参拝のときには七面山まで足を伸していないが、十一月の七面山参拝の日程を組むために接触したさい、丹前の奉納を依頼された

表1 立正佼成会の聖地因参

年次	対象	名称	期間	日程	編成	総人数	備考	典拠
昭和15年	身延山・七面山		9月		1組	19人		『庭野日敬年譜』
16年	身延山・七面山		秋		1組	55人		『法輪讀歌』
17年	誕生寺 身延山・七面山		2月16日 9月		1組	99人		『法話選集・年譜』 『法輪讀歌』
18年	誕生寺							『法輪讀歌』
19年	身延山・七面山							『法輪讀歌』
20年	身延山・七面山	本尊勸請 お礼参拜	11月16～20日		1組	88人		『庭野日敬自伝』
23年	身延山 身延山・七面山		8月7～9日 11月6～10日	2泊3日 3泊4日	1組 2組	37人		『日報』 『日報』
24年	身延山 身延山 身延山 誕生寺・清澄山 龍口寺	道場竣工 記念初詣 道場落成 お礼参拜	1月6～14日	1泊2日	8組	2,000人以上		『日報』
	身延山 (七面山)		4月19～27日	2泊3日	4組	107人	会長外8人 七面山参拜	『日報』
	誕生寺・清澄山		5月19～21日	2泊3日	1組	98人		『日報』
	身延山	入山会参拜	6月16～18日	2泊3日	1組	170人余		『日報』
	誕生寺		7月12～14日	2泊3日	1組			『日報』
	龍口寺	法難会	9月12日	1日		約2,600人余		『日報』

新宗教における教団内聖地の確立過程

25年	妙法寺 身延山	秋季団参 お会式	9月22日～ 10月10日 10月13日	3泊4日(1組) 2泊3日(5組)	6組	(2,500人) (13,000人)	うち1組270人 の七面山参 拜	『日報』 『日報』 『日報』
	龍口寺 誕生寺	お会式	11月12～13日	1泊2日	2班	554人		
26年	妙法寺 身延山	初詣り	1月2日	2泊3日	6組	約7,000人 (3,626人)		『日報』
	龍口寺	初詣り	1月6～24日	1日	30人余			『日報』
	誕生寺	誕生会	1月29日	1泊2日	367人			『日報』
	誕生寺・清澄山	誕生会	2月16～17日	1泊2日	7組	(約5,000人)		『日報』『交成』
	誕生寺	誕生会	4月16日～ 5月2日	1泊2日				『日報』
	身延山	第二道場建設 祈願	5月25～26日	1泊2日				
	身延山	入山会	6月16～18日	2泊3日		約600人	中野築 臨時列車で	『日報』『交成』
	身延山	入山会	8月19～20日	1泊2日	2班	448人	1班東海道線 2班中央線で	『日報』『交成』
	身延門寒寺	盆施餓鬼会	9月19～20日	1日	11班	約9,000人		『日報』『交成』
	龍口寺 妙法寺	法難会 お会式	9月12日 10月13日	1日		約20,000人		『日報』『交成』
26年	身延山・七面山	秋季団参	10月19日～ 11月20日	3泊4日(2組) 2泊3日(5組)	7組	約2,700人		『日報』『交成』
	身延山	初詣り	1月10～24日	1泊2日	12組	6,497人	中野駅発 臨時列車で	『日報』『交成』
26年	誕生寺・清澄山	入山会	5月7～21日	1泊2日	12組	約12,000人	中野駅発 臨時列車で	『日報』『交成』
	身延山	入山会	6月16～18日	2泊3日	1組	(216人)		『日報』『交成』

年次	対象象	名称	期間	日程	編成	総人数	備考	典拠
26年	円実寺・身延山	盆施餓鬼会 道場落成 お礼参拜	8月19～20日	1泊2日	1組	約700人	中野駅発 臨時列車で	『日報』『交成』
	龍口寺	法難会	9月12日	1日	11班	約16,000人	うち特別班 1,000人	『日報』『交成』
	妙法寺	お会式	10月13日			本部特別班 80人余	この年から 本部中心	『日報』『交成』
	身延山・七面山	秋季団参	10月6日～ 11月18日	3泊4日(12組) 2泊3日(14組)	26組	約13,000人		『日報』『交成』
27年	身延山	初詣り	1月11～27日	1泊2日	14組	約13,000人		『日報』『交成』
	誕生寺	誕生会	2月16～17日	1泊2日	1組	約700人	中野駅発 臨時電車で	『日報』『交成』
	誕生寺・清澄山	開教七百年 記念参拜	3月20日～ 4月19日	1泊2日	23組	約20,000人		『日報』『交成』
	本門寺・円実寺	円実寺本堂 落成式	4月13～14日	1泊2日	1組	約250人		『日報』『交成』
	円実寺・身延山	円実寺	6月16～19日	1泊2日	3組	約2,000人	身延山入山会	『日報』『交成』
	身延山	夏季参拜	7月21～25日	2泊3日	3組	1,521人		『日報』『交成』
	円実寺	盆施餓鬼会	8月19～20日	1泊2日	1組	489人	うち特別班 3,500人	『日報』『交成』
	龍口寺	法難会	9月12日	1日		約30,000人		『日報』『交成』
身延山	秋季参拜	10月16日～ 11月12日	1泊2日	18組	約12,000人	中野駅発臨時 で中央線・東 海道線経由	『日報』『交成』	

聖地確立の教団内における新宗教

本門寺 誕生寺	お会式 特別参拝	11月13日 11月16～17日	1日 1泊2日	1組	約400人 約110人	会長副会長 参加せず	『日報』『交成』 『日報』『交成』
28年 身延山	初詣り	1月26～27日	1泊2日	1組	約500人	会長副会長 参加せず	『日報』『交成』
誕生寺	誕生会	2月16～19日	1泊2日	3組	約3,000人	中野駅発 臨時列車で	『日報』『交成』
誕生寺・清澄山	春季参拝	4月9～27日	1泊2日	16組	約15,500人	同上	『日報』『交成』
佐渡	霊脉団参	6月1～4日	3泊4日	1組	500人		『日報』『交成』
誕生寺		7月26～27日	1泊2日	1組	111人	小湊道場へも 参拝	『日報』
円実寺	盆施餓鬼会	8月19～20日	1泊2日	1組	540人		『日報』『交成』
龍口寺	法難会	9月12日	1日	1組	約16,000人	うち特別班 1,600人	『日報』『交成』
身延山・七面山	秋季参拝	10月16日～ 11月19日	2泊3日	15組	約13,000人	中野駅発臨時 で中央線・東 海道線経由	『日報』『交成』
29年 誕生寺	誕生会	2月16～17日	1泊2日	1組	約900人	中野駅発 臨時列車で	『日報』『交成』
誕生寺・清澄山	春季参拝	4月10日～ 5月1日	1泊2日	16組	約17,600人		『日報』『交成』
円実寺	盆施餓鬼会	8月19～20日	1泊2日	1組	約280人	バス6台で うち特別班 1,000人	『日報』『交成』
龍口寺	法難会	9月12日	1日	1組	約15,000人		『日報』『交成』
30年 誕生寺	誕生会	2月16～17日	1泊2日	2班	約1,000人	中野駅発 臨時列車で	『日報』『交成』

年次	対象	名称	期間	日程	編成	総人数	備考	典拠
30年	誕生寺・清澄山 円実寺 龍口寺	春季参拝 盆施餓鬼会 法難会	4月16～28日	1泊2日	11組	約12,000人 約600人	バス15台で バス14台で 5名特別班 1,400人	『日報』『交成』
			8月19～20日	1泊2日				『日報』『交成』
31年	誕生寺 誕生寺・清澄山 円実寺 龍口寺	誕生会 春季参拝 盆施餓鬼会 法難会	9月12日	1日	10組	約10,000人	バス15台で バス14台で 5名特別班 1,400人	『交成』
			2月16～17日	1泊2日				『日報』『交成』
32年	誕生寺 誕生寺・清澄山 円実寺	誕生会 春季参拝 盆施餓鬼会	4月11～27日	1泊2日	6組	約700人	バス15台で バス14台で 5名特別班 1,400人	『日報』『年鑑』
			8月19～20日	1泊2日				『日報』『交成』
33年	誕生寺 身延山・七面山 円実寺	誕生会 盆施餓鬼会	2月16～17日	1泊2日	8組	約5,000人	バス15台で バス14台で 5名特別班 1,400人	『交成』
			3月6～20日	3泊4日				『日報』『交成』
			8月19～20日	1泊2日		約460人		『日報』『交成』

のであろう。宿坊としては、のどから手が出るくらい、欲しいものだったに違いない。しかし、当時人々は敗戦直後の物資欠乏の極にあり、生活必需品はことごとく配給制度のもとにきびしく統制されていた。その時代に、よくも丹前七〇人分の生地と綿を入手しえたものである。

二十三年十一月、身延・七面山団参

この年秋の身延・七面山団参は、久しぶりに白衣・禪を新調して行なわれた。しかしめいめで白生地を入手することは至難である。そこで本部でまとめて買った。オールスフの反物、それも一本ずつ、恐らく経済警察の目を盗んで、いわゆる闇の品物を入手するほかなかった。政府の配給物資にだけ依存していたのでは、栄養失調になるほかなかった時代に、国民は闇と称する品物を苦心して入手し、飢をしのいだ。佼成会の会員も同様であり、多数の会員のなかには、スフの白生地を入手できる立場の者もいたのである。参拝に携帯する食糧の調達も容易でなかったが、会員からの供物のなかから、最高幹部の食糧が確保された。新調された白衣には、会長がお題目を書き、神とを入れた。また、出発の一〇日前から毎朝幹部が道場に集まって特別の修行をした。そのうゑ、幹部始め団参加者は早朝自宅で水行をしたとみてよい。登山はまさに修行であったのである。参拝者の行動に対する身延本山・身延町民の評判も甚だよかった。本山に奉納金が上がり、身延の旅館・仏具屋・土産物屋にまとまった現金が落ちたための好評以上のものであった。旅館・仏具屋等には、当時供給不足だった経巻・数珠の類も世話してもらい、急増する会員の需要に応ずると共に、仲介者には相応の利益をえさせていた。また、身延山の僧侶養成機関である専修学院には、生徒の食料代にと多額の寄附を惜しまなかった。佼成会は身延(奥の院思親園)・七面山を聖地として団参し、会員に信仰体験を深めさせる機会また団体訓練の機会としたが、他

方身延山は佼成会の団参により、また団参によって深まった佼成会との関係によって、経済的にうるおった。信仰的にも目を開かせられる思いをしたことであらう。

このとき二組すなわち二回に分けた団参の総人員はどのくらいだったのか、新調の白衣の数が推計の基礎となるだろうが、ともあれ記録からこれを明らかにしえない。霊友会を意識し、霊友会の団参とかちあって、修行団参に似つかわしくない不測の事態の起きることを慮り、そうしたことになるようにコースを選んだために、二組に分けることになったという。そこで、一組にまとめることもできる人数だったと推測されるのである。

二十四年一月、身延山初詣り

初詣りは各組一泊二日、八組の編成で予定の二千人を上廻る好成績を挙げた。佼成会では、昭和十七年に建てた二五坪の会堂では急増する信者（十七年約千世帯、二十三年末約一万八千世帯）をさばきえないので、二十三年新道場の建設に着手し、年末には附属家屋ともて延一六八坪の堂々たる建物の竣工をみた。建築費も予算を超えたが、追加資金確保のために企画した初詣りに予想以上の参加があったことで、定めし新道場建築費の不足分は予定どおり補填しえたことであらう。そのような余裕のない財政状態であったにかかわらず、身延本山から三〇万円の寄附依頼、身延山別院から映写機修理代の奉納依頼と、身延からの無心が続く。信者団体として、佼成会はそれ

それに誠心誠意応えていったのである。

以下、詳細は省略するが、昭和二十四年について箇条書き風に列挙するなら、

二月十二～十四日 新道場落成(二月二十八日落成式挙行) お礼のため、会長副会長が一四〇人近くの会員を率いて身延山に参拝。

四月十九～二十七日 四組に分かれて二泊三日の身延山団参。会長は八人の供をつれて七面山に登拝。
六月十六～十八日 会長副会長ほか九六人で身延山入山会に参拝。

九月二十二日～十月十日 六組に分けて身延山・七面山へ秋季団参。

このように、三度(初詣り・春・秋)の長期登山と二度(お礼・入山会)の短期参拝を『日報』は記録にとどめている。のみならず、その年は誕生寺・清澄山方面へも団参を再開しているのである。

五月十九～二十一日 会長副会長以下一〇〇余名の会員が、誕生寺から清澄山まで登拝。

七月十二～十四日 副会長が一七〇余名の会員を供に、誕生寺へ参拝。

十一月十二～十三日 会長副会長以下五五四名が、千葉駅発と両国駅発の二班に分かれて、誕生寺のお会式のため団参。纏・万燈はトラックで別に運搬。

以上、お会式を含めて三回の団参であった。そのほかに、

九月十二日 片瀬の龍口寺りゅうこうじの法難会に、会長、副会長以下二千六百余名が団参。

十月十三日 杉並区堀ノ内妙法寺のお会式に、一万三千人をくり出して参加。

団参とは、本来、遠隔の聖地への集団参詣であるから、佼成会の本部から徒歩で二〇分もかからぬ妙法寺への参詣は、厳密には団参に含まれない。しかし、本稿で問題とする教団外聖地から教団内聖地への推移は、遠隔の聖地から至近距離の聖地への推移と、ある程度重なっていることを思うなら、近傍の聖地にも団参の語を拡大適用することは、妥当であり、また必要でもあると考えられるのである。

昭和二十四年の団参対象となった聖地は、身延山・七面山、誕生寺・清澄山、龍口寺、妙法寺の四ヵ所である。後年これに追加されるのは、二十五年以降の身延波木井山円実寺、二十七年の富士北山本門寺と、二十八年の佐渡霊跡の三ヵ所にとどまる。では、以上七ヵ所はどのような意味において、佼成会が聖地とし、団参の対象としたのであろうか。

身延山久遠寺(山梨県南巨摩郡身延町)は、周知のように日蓮退隱の地に発祥した日蓮宗総本山であり、日蓮の廟所を擁する聖地である。背後の身延山(標高一四八メートル)には奥の院思親閣があり、団参の対象とされる。ここからは視界が開けて、遠く房総半島を望むことができるので、日蓮は遙か小湊の両親の墓を拝して追慕したと伝えられる。⁽¹⁶⁾さらに七里の峻しい道を辿って登拝される七面山(標高一九三二メートル)は、法華經守護の七面大明神を祀る霊山であって、富士山頂に來光を仰ぎうるところから、法華系の行者にとって登拝修行の聖地とされ、佼成会もその例に漏れなかった。

小湊誕生寺(千葉県安房郡小湊町)は、日蓮生誕の地に弟子日家によって開創された日蓮宗大本山である。佼成会にとっては、妙佼副会長が昭和十八年にその龍王堂に参籠した縁があり、二十八年五月以降は小湊支部道場がその門前で活動しているという特殊関係にある。小湊の北西に連なる清澄山(標高三八三メートル)には、日蓮が一二歳で出家した千光山清澄寺(日蓮宗別格山)があり、またこの山は日蓮が三二歳で立教開宗した聖地である。

龍口龍口寺(神奈川県藤沢市片瀬)は、日蓮が斬罪に処せられるばかりになった故地に創建された寺。法難会が最大の行事である。

堀ノ内妙法寺(東京都杉並区堀ノ内)は、「厄除けのお祖師さま」とよばれる日蓮像を安置することによって著名な、佼成会本部に近い日蓮宗の名刹。

波木井山円実寺(山梨県南巨摩郡身延町)は、日蓮草鞋脱ぎ一ヵ月停住の聖跡であり、檀越波木井実長が居館をあらためて開基した日蓮宗の名刹である。盆施餓鬼会に当って行なわれる富士川での川施餓鬼は、江戸時代以来の著名な年中行事であって、昔は甲府から舟で富士川を下って波木井詣りをし、川を上下しながら塔婆を流して供養したという。塔婆を組んでつくった輿が富士川へ運ばれ、彼岸到達の祈念がこらされる⁽¹⁸⁾のが、呼びものである。円実寺の現住職(元身延専修学院教授)は佼成会の教えと実践に共鳴して入会し、佼成会が法人となった時顧問に推挙され、円実寺を拠点とする佼成会身延支部発足(昭和二十五年八月)の柱となった。この関係で、円実寺の盆施餓鬼会にむけて、団参がなされ

たのである。

七〇

富士北山本門寺(静岡県富士宮市北山)は、日蓮の高弟日興が開いた名刹、富士五門の一つ、日蓮宗大本山である。

佐渡霊跡とは、佐渡に配流された日蓮の遺跡のことであるのは、言うを俟たない。⁽¹⁹⁾

以上のように、団参対象はいずれも日蓮ゆかりの霊跡・名刹である。みな聖地であるが、霊跡めぐりの感がある佐渡を別とすれば、これを二類に区別することができる。第一類は、まさに聖地といふべきものであって、身延・七面山がその代表であり、誕生寺は清澄山とセットとなつてこの意味の聖地を構成している。第一類に共通するところは、修行の場たりうる聖なる山をもつことであつて、それゆえに、著名な年中行事の折でなくとも、いふなれば常時、靈性を帯びることである。佼成会では身延・七面山を「お山」と呼び、団参対象が誕生寺・清澄山に移ると、これをも「お山」と呼ぶようになったことが、示唆的である。第二類は、日蓮の事跡と関連する著名な年中行事をもつもので、その年中行事のさいに靈性が高揚され、聖地となる。最大の年中行事に佼成会の大団参が纏・万燈などをおし立ててくりこむため、行事はさながら祭礼の觀を呈した。龍口寺(法難念)・妙法寺(お会式)・円実寺(川施餓鬼念)・本門寺(お会式)、みなしかりである。第一類を根本聖地、第二類をイベント聖地、そして佐渡のように巡拝対象たる一連の靈跡を巡礼聖地と呼んでみようと思ふ。⁽²⁰⁾

纏・万燈をおし立ててくり出す大団参は、昭和二十四年秋から始まつた。『日報』によれば、九月

八日、纏を神田のだし鉄に注文、これは二〇日に完成の予定であったが、少し前に注文したのがある
とみえて、翌九日には、纏一本完成、早速一週間の練習を開始。また同日、支部旗三〇本と倭成会腕
章百本が出来上って届けられた。支部旗と腕章は十二日の龍口寺参拝のためであって、その前日に、
各支部に支部旗を渡し、組長・旗手には腕章を渡した。この当時すでに三〇の支部が成立していたの
である。各支部に渡した支部旗は単に支部の標識であって、翌二十五年五月に授与が開始される移動
本尊としての支部旗とは異なるが、少なくともその先駆としての意義を認めることができる。さて九
月十二日には、約二千六百人の会員が本部御旗を先頭に、支部ごとに支部旗をおして、役員は倭成
会の腕章をつけて、隊伍堂々整然と行進し、道行く人や参詣人を驚かした。翌十三日から(団扇)太
鼓の練習が始まり、纏の練習と並んで行なわれた。十六日には鐘五個調達。二十一日、纏の入場式を
行なう。身延・七面山への秋季参拝で中断するが、十月一日から太鼓の練習を再開。七日には、万燈
五重塔ほか四基完成(高張)提灯も出来上る。八日、予定の万燈七基全部完成。十日の『日報』には、
「お会式も間近に迫り、連日猛烈に練習を行っている」とある。纏・太鼓などの練習である。十一日
にはお会式の予行演習を実施し、いよいよ十三日のお会式には、高張提灯・纏二本・万燈七基・鐘五
個・団扇太鼓多数を含む三千名の大行進を、鍋屋横丁・青梅街道経由で堀ノ内妙法寺に向かつて起こ
したのである。⁽²¹⁾さらに十一月十二日には、小湊誕生寺のお会式に纏・万燈を携えて参加した。そし
て、翌年九月の龍口寺法難会には九千人の会員をくり出し、高張提灯を前駆として、本部御旗、その

年授与された支部御旗二二本、纏二本、万燈四基、鐘・笛・団扇太鼓を含む大行進を展開したのであった。

戦中戦後、長らく杜絶えていた神社の祭礼が復活したのは、藺田稔によれば昭和二十六、七年頃のことであったといふ⁽²²⁾。佼成会の第一回お会式参加はそれより二年も早い二十四年秋のことだった。二十五年夏以降朝鮮戦争による特需景気で日本経済が復調に向けて始動するまでは、国民の経済生活は極度に逼迫しており、人々は衣食足らず、ために祭礼どころの騒ぎではなかった。その時早くも佼成会は、本格的なお会式絵巻を復興したのであった。それは、占領下のアメリカ化一色の、そして戦後改革がつぎからつぎへと断行されていた時代に、民族の伝統に培われた生活行事の再興を先取りするものであった。当然、佼成会は、日蓮靈跡の年中行事への絢爛たる大挙団参によって、世間の注目を惹いた。そこで、佼成会にとつてこうした行事に参加することは、日蓮への信仰の表明であると共に、宗教運動体としての自意識の表現であり、新興とはいえ、力をつけてきたことへの社会的承認を求め、PR的集団行動であったともみなされよう。

さて、団参対象の聖地は、いずれも日蓮ゆかりの聖跡であるが、そのうち身延・七面山および誕生寺・清澄山、すなわち根本聖地への団参は、佼成会の母体ともいふべき靈友会の行事を継承したものとみなしうる⁽²³⁾。しかし、他の聖跡つまりイベント聖地はそうではない。では、何故、佼成会がいくつもの日蓮靈跡を団参対象に加えたのであろうか。個々にはそれぞれの理由があるにしても、全体に通

じるのは、庭野会長が日蓮に帰依して、敗戦直後、日蓮宗に接近した、ということである。庭野は『自伝』のなかでつぎのように回想している。

昭和十三年以来、神示によって《法華三部経》以外のあるゆる書物も、新聞も、雑誌も読むことを禁じられていた私は、ただひたすら經典のみを勉強していた。ところが、二十年の二月十五日になって、日蓮聖人の御遺文だけは読んでよろしいという啓示があった。

飢えたものが食を与えられたように、貪り読んだ。読んでみると、感激することばかりである。自分が《法華経》の解釈や受け取り方でさんさん悩んだところを、やはり日蓮聖人も悩んでおられる。すべてが、ひしひしと胸にこたえるのだ。

また、ご消息の類を読むと、家庭における信仰態度や親子・夫婦・師弟の間柄などについて、きわめてわかりやすく説かれている。月経のあるとき神仏を拜んでいいかという女人の質問にまで、懇切に教えておられるのだ。日蓮聖人とはなんとという偉いお方であつたらう——という讚嘆の気持でいっぱいになった。

と同時に私は、日蓮宗というものを見直す気持になった。このような偉い祖師をもった日蓮宗には、きつとすぐれた宗教家がたくさんおられることだろうと思った。私はすぐ日蓮宗に近づいていった。⁽²⁴⁾

こうして庭野は、日蓮宗の僧侶たちに会って話を聞いてみた。二十三年八月二十一日から二十三日まで、堀ノ内妙法寺に立正大学の久保田正文がきて法話をしたので、連日出席し、後日何らかの機会に佼成会でも説法を依頼したいと、久保田講師の住所を尋ね、また法華經に関する著書の送付方を依頼している。⁽²⁵⁾久保田の法話に感銘を受けたのである。しかし、これなどむしろ例外であって、たいがいの僧侶はただお題目を唱えればよい、というのが主眼の信仰だった。庭野は、読経唱題の口業中心の修行を脱して、六根懺悔と菩薩道実行という意業および身業中心の修行に移らねばならぬと考えていたから、僧侶たちの実態に失望した。ついに庭野は、二十三年、総本山の身延山久遠寺に総務の藤井日静（のちの身延山第八六法王）を訪ねて面会を求めたが、全く相手にしてくれない。翌二十四年には増田日遠（のち身延山第八五法主）が総務として入山したので、二月の道場落成お礼参拝のさいに面会を求め、⁽²⁷⁾意気投合する思いをした。とくに布教方法について意見が一致したのである。庭野の『自伝』は語る。

話し合ってみると、じつに話がよく合うのである。私は、日蓮宗が祖師日蓮聖人の時代のような生命力に満ちた宗教になることを望んだ。そして、布教活動を大々的に行なって、救世利民の実を挙げることを願った。だから、

「法華經」を所依の經典とし、お題目を唱える宗派が大同団結し、僧俗一体になって、大運動

を起こそうではありませんか」

と、主張した。増田さんは、まったく君の言うとおりで、全面的に賛成だ——と言われる。これはありがたい理解者が現われたものだ、私は大いに喜んだ。

私は、つねに大同ということを考えている人間である。分派・分立が宗教の癌であることを痛感しているからだ。霊友会から独立したのも、教義が相容れなかったためであって、へおれが……という気持などは毛頭なかった。だから、日蓮宗が音頭をとって大同団結することになれば、佼成会は喜んでその傘下にはいるうと思っていたのだ。

(それで) 私は何かにつけて身延にはせ参じた。会員の身延山詣では、以前から年中行事にしていたが、それをますます盛んにした。日朝上人四百五十遠忌のときも、大々的な参詣をした。大映で《霊山》という映画をつくったときは、信者六百人を連れてお参りに行き、その人たちをエキストラとして提供した。⁽²⁷⁾

庭野は日蓮に帰依し、日蓮門下の大同団結による大々の布教を夢みた。そこで、リーダーと頼む日蓮宗の霊跡寺院の代表的年中行事に、団参を送って協力の実を示そうとしたのである。団参は佼成会にとって、対内的にも対外的にも意義ある行事であったが、庭野の意図はそれらの意義の横たわる地平を越えていた。団参対象の拡大も、そうした意団に支えられて実現したのである。

四 団參聖地の變化

日蓮宗への接近が団參聖地を拡げたのだが、まさにそのことが、なかでも身延山への接近が、さきに垣間みたような団參聖地の變化をもたらす直接の契機となつたのである。

身延山当局の関心は、庭野が率いる佼成会を内心では軽蔑しながら、自分たちでは及びもつかない動員力・集金力を利用しようというものであつたらしい。庭野の『自伝』にあるように、切に面会を求め庭野をまるで相手にしなかつた藤井総務だったが、昭和二十三年十二月六日には、三〇万円の寄附を求めて佼成会本部を訪問している。しかも、前々日の四日に電報で出京を連絡してきたので、会長の指示で中野駅まで迎えが出たが、その日はついに来ず、翌々日來るといふ有様であつた。⁽²⁹⁾

二十五年六月の入山会は、六七七年前に日蓮と波木井実長が対面して身延入山の契りを結んだ故実に因り、身延山法主が行列を従えて入山し、庭野会長・妙佼副会長が特別大本願人として出迎への先頭に立つ、という形で美々しく開幕された。⁽³⁰⁾ここに象徴されるように、佼成会の「両先生」は今様波木井実長であり、身延山外護の代表的勢力のひとつと自他共に認めるまでになつていた。

身延町の旅館・仏具屋・土産物屋などのなかに、佼成会会員の行動に感銘を受けて、入会する者があいついだ。しかも、二十五年八月には、「どうしても今後のお寺は立正佼成会の方法で行くのでな

ければならない。仏教成立当時のことを思うと、やはり今のお寺のやり方は間違っている」と考えて入会していた波木井山円実寺住職を核として、佼成会身延支部が結成され、信者の結束が企てられた。⁽²¹⁾ 佼成会に入会しても、久遠寺山内宿坊の檀家であることをやめたり、あるいは住職が寺もろとも転宗するわけではないが、身延山の足許から入会者が八〇世帯もあらわれ、波木井実長開基の身延の名利円実寺の住職で、身延専修学院教授である学僧まで、佼成会の信者になるようでは、お題目信者の総本山を自認する身延山として、到底黙止できなかった。佼成会は身延山外護の信者団体であるような仮面を被って接近し、足許の檀家を奪い、寺院を乗っ取ろうとしているのではないかという疑惑が広がり、円実寺住職の処分問題も話題にされ出した。しかし、佼成会と絶縁するのはやさしいが、開帳料だけでも年間百万円近くになる金づるを断ちきるのは惜しい。昭和二十五年から二十六年にかけて、佼成会に対する身延山の歓迎ムードは微妙なかげりをみせながら、表面上は事もなく友好関係が維持されていた。

しかるに、二十六年秋の団参に先立って、身延山から開帳料の増額を求めてきたことから、事態は急速に悪化した。すでに従来⁽³²⁾の額で予算を立てて参加者から集金しているのみならず、要求額が承引できる大きさではなかった⁽³²⁾ので、佼成会としてはこの依頼をことわった。すると、団参が終ったあと、身延支部に属する旅館業主ら一七名の会員に、佼成会は戒名をつけかえるからいけないとか、佼成会との二股信仰をやめない者は離檀させるなど⁽³³⁾といひ、身延山宿坊から圧迫を加えてきた。ここにお

いて佼成会は、身延山に拠る日蓮宗宗務当局に対して、明確な態度をとることを迫られたのである。

その年、二十六年八月、身延山総務の増田日遠が法華宗の代表を帯同して庭野と会い、先年の約束の一端が実現の運びとなったので是非加わってほしいと、日蓮門下協議会への参加を求めた。庭野は欣然これに応じた。日蓮門下協議会は日蓮宗を盟主とし、法華宗本門流・同陣門流・仏立宗・日本山妙法寺、それに靈友会系の立正佼成会・妙智会・仏所護念会・妙道会・大慧会の、新旧・大小一〇教団を傘下におさめて、八月十八日発足した。日蓮門下でも、日蓮正宗・法華宗真門流・日蓮宗不受不施派・日蓮講門宗・靈友会などは、招かれなかったのかどうか、とにかく参加していないのである。協議会は発足の日、つぎの四項目を決議し、行動目標とした。すなわち、

- 一、立教七百年に当り我等門下は協力一致皆歸妙法の願業に精進す。
- 二、清澄寺記念式典、久遠寺御真骨奉遷式典には門下教団一致して参列す。
- 三、仏教統一の誓願の門下教団は異体同心の祖訓を實踐す。

四、七百年記念伝道事業に対しては、協議会に於てその方針を定め和衷協力す。⁽³⁴⁾

決議のうち、(一)、(三)、(四)は庭野の平素の念願と一致し、(二)とて異存はなかった。しかしほどなく、この協議会は立教七百年の慶讃法要を盛大に挙行することだけのために結成されたもので、大々的な協力布教などには熱意のないことが判明した。日蓮門下協議会の傘下に新興の法華系諸教団をも対等の立場で参加させることにより、その動員力と資金調達能力を、既成の日蓮系教団とくに日蓮宗のた

めに利用しようというものだったのである。庭野は隠された真の目的を知っていたく失望した。折しも、開帳料増額要求辞退に発する身延支部会員への圧迫事件が起きていた。佼成会はここにおいて、最早日蓮宗に協力できないとの結論に達し、その姿勢を日蓮門下協議会からの脱退をもって示した。脱退宣言は昭和二十七年一月七日、協議会の定例会の席上なされた。

その年は一月十一日から恒例の身延山初詣りが始まり、一万三千人の参加者を一四組に編成して、すでに約八一〇名の第三組が現地に入っていた。一月十五日、今年最初の本部命日として、三万八千五百名を超える参拝者で混雑をきわめた佼成会本部に、午前十時すぎ、身延山から、「宗門の方針に即して、爾今佼成会の標識を公示した団体参拝に対しては、本山内の開扉および案内はしない」との公式電話が入った。実は二日前に第三組が身延山でこの示達に接して立往生したのだが、ここにおいて佼成会は、身延本山との提携の望みを全く捨てることになったのである。庭野は昭和十三年の靈友会からの分離を第一の階段と呼び、今回の日蓮宗との絶縁はさらに大きな第二の階段をなすものと位置づけて、創立一五周年の記念すべき年に新しい歩みを踏み出すことにたいし、身のひきしまる思いをかみしめた。⁽³⁵⁾

身延山諸堂の開帳を拒否されても、初詣りの団参は予定どおり送り出された。現地で日蓮廟所に参拝するほかは予定を変更して、身延総門前で説法会を開いた。佼成会独特の赤裸々な体験談、血を吐くような懺悔説法は、身延町の人々に大きな感銘を与えずにはおかなかった。しかし身延山はこれの

中止をも申込んできた。⁽³⁶⁾

佼成会の団参に対する身延側の不満の根深いところに、身延に来ても旅館に宿泊し、三二坊もある宿坊に泊らないので、宿坊にとっては団参受入れのうまみがない、とうことがあったようである。⁽³⁷⁾ 佼成会としては、一組五百人から千人近くにもなる大部隊をよく掌握して、佼成会流の修行を行なうには、宿坊よりは旅館のほうが便利であったのである。二十七年四月の開教七百年記念行事が近づいてきた頃、かりに佼成会が身延に参拝団を送りこんできて、旅館に泊りきれない場合でも、宿坊は佼成会の宿泊申込みには応じないと申し合わせたのは、宿坊としての恨みが顔をのぞかせたものといえる。⁽³⁸⁾

身延山と同じく宿泊参拝のある小湊でも、地元には佼成会に入会する者が続々あらわれていた。しかし誕生寺住職加藤日義は庭野の主張を支持し、元身延山総務で麻布妙像寺住職の堀龍淳や、元立正大学教授で北山本門寺住職の片山日幹らと共に、宗門にあって僧籍剝奪の処分を遭いかねない波木井山円実寺住職岩田日成の弁護にまわるほどであった。そこで佼成会は、同年三月から四月にかけて、二、三組約二万人の開教七百年記念大参拝団を日蓮開教の地清澄山と誕生寺に送るだけで、かの日蓮門下協議会の決議に謳われていた久遠寺御真骨奉遷式典には参列しなかった。身延山から、開扉も山内案内も拒否され、旅館であぶれても宿坊に泊らせないと申し合わされている以上、久遠寺の式典に参列する筋合はなかったからである。

それでも、小湊参拝の第二〇組が出発した四月十三日の朝、会長副会長が率いる二百数十名の参拝団を身延に送った。東海道線經由で、途中まず片山日幹の薫する北山本門寺に参拝し、身延に着いて日蓮廟所に参拝しようとした。ところが、身延山当局は霊山橋以内への佼成会信者の立入りを禁じ、事実上、祖廟参拝をさし止めてしまった。⁽³⁹⁾ 参拝団は争いを避けてその日は旅館で読経し、翌日、波木井山円実寺で岩田日成の熱烈火を吐く説法に感涙に咽んだのであった。

佼成会と身延山との紛争は、地元紙が「佼成会、本山と激突」／「日蓮宗に非ず」と身延では御開扉拒否⁽⁴⁰⁾（山梨日日、昭27・1・23）「身延山、佼成会紛争に手を焼く」⁽⁴¹⁾（新山梨、昭27・2・23）「身延山問題愈よ激化、佼成会員は離壇」と通告⁽⁴²⁾（山梨日日、昭27・2・23）などと度々報じ、山梨県下で人々の話題となった。それに加えて、東京日日新聞（昭27・2・21）が、邪教立正佼成会よ非を悟れ、と破門したような印象を与える増田宗務総監の談話を掲載したことにより、問題が地元を超えて表面化した。そうなる⁽⁴⁰⁾と斡旋を買って出る人があり、両者歩み寄りの気運が芽生えた。身延山側では山内三二坊が和解三条件をまとめてきたのだが、それは、(一)佼成会身延支部を解消すること、(二)今後身延において会員獲得運動を行なわないこと、(三)三宝の否定を改めること、であった。⁽⁴¹⁾ 三宝とは仏・法・僧のことであり、(三)の主張は、詮ずるところ、俗人のくせに僧侶と対等の口をきくな、ということであろう。この和解三条件が提案されたのは、三月中旬のことであった。去る二月九日早朝、身延山の鐘楼が火災で焼失した時も、絶縁状態であるにもかかわらず、懇ろな見舞の電報を発信した佼成会であ

(42) るから、和解は望むところであったが、右のような三条件は呑めるはずもなかった。そのあと、祖廟参拝妨害事件がもち上ったのである。

身延山と佼成会の紛争が発端する頃から、一つのことが始まり、完成を目ざしてひたむきに進んでいた。それは波木井山円実寺の本堂再建事業である。住職岩田日成が昭和二十二年に一五年計画でこれを発願したが、遅々として進捗しなかった。しかるに、佼成会庭野会長・妙佼副会長の知遇をえて、二十五年二月地鎮祭にこぎつけ、二十七年二月上棟式、そして六月十七日の身延入山会を期して、一〇間四面建坪一一一坪の大本堂落成式を挙げる手筈になっていた。身延本山では、やっかみ半分から、建築が完成した上は岩田の任職を罷免するといふらした。(43) 本山にとって、岩田は目の上のこぶだったのである。

他方、身延山の責任役員・前国務大臣自由党代議士山口喜久一郎（和歌山県選出）らが、身延山側の依頼を受けて和解斡旋に乗り出していた。今度は条件など一切つけず、無条件で和解するという提案にまともだったので、佼成会側は直ちにこれに応じた。和解は、円実寺本堂落成式のために、会長副会長が会員約二千人を率いて出席する機会をかり、六月十六日、身延山新書院に両者代表が会同してなされた。その席上、庭野はつぎのように発言したと伝えられる。

日蓮大聖人の教えは一つであるが、実行の面において根本的に相違点がある。それを解決せず

しては、今後二、三年たつてまたこのようなことが必ず出て来ると思う。身延山は総本山なのであるから、こうなくてはならぬという、私共に納得の行くような指導方針があつてもよいはずである。この意味で私は、増田総監が就任された初対面からこれを力説し、統一的立場をとつて下さるよう要望して来たのであるが、そういうことに対しては御山から何の指導も注意もなく、たまたま今春早々お開帳問題その他雑多の問題から一方的に非難排撃され、出入禁止だとか破門したとかいろいろの悪宣伝をされている。しかし私共は何を言われてもただ笑つて来た。今日はよい機会を与えて下さったので、一切を申上げてお互に和解点を見出したいと思う。

波木井山のことでも大分問題にされたが、私たちが在家はむしろ僧侶以上に日々の行いについて精進努力している積りである。大聖人の教えは一つしかないはずである。一体出家と在家の境はどこにあるのか。大聖人開教七百年を迎えた今日、私共も真剣にやるつもり故、僧侶方もほんとうに真剣にやっていたきたい。

庭野のこの発言に対して増田は儀礼的言辞に終始し、問題点の逐一に多くを答えることができなかった。結論として、増田は、

すべては私の不徳と部下の監督不行届から起こったことで、この点申しわけなく思っている。

本山としては何ら他意はないのであるが、大勢の中だから不用意の言葉が因となって立正佼成会に御迷惑をおかけした。今日は一切を水に流して元通りのおつき合いを願いたい。⁽⁴⁴⁾

と述べたという。佼成会側に立つ新聞の報道だから、ある程度割引いて考えなければならぬが、それにしても、和解の会談は佼成会側の問題提起と身延山側の遁辞と謝罪に終始した感を否めない。会談の場所は身延山に設定されたが、あれほど非難攻撃していた波木井山の本堂落成式の機会に和解が実現したという状況が、新聞報道のムードが偽りのものでないことを暗示しているのである。

和解成った翌日、波木井山の落成式後、参拝団は身延本山にまわり、案内をえて旧のごとく入山会団参了することができた。そのあと、佼成会は二十七年中に夏季参拝と秋季参拝を実施して旧状に復したようにみえたが、翌二十八年は初詣りと秋季参拝の二回だけとなった。そして誕生寺・清澄山への春季参拝がその代りに登場するのである。庭野は、日蓮門下協議会から脱退したとき、すでに決定的に身延山と袂別していた。六月十六日の和解のための会談は、壊れた心をつなぎあわせる好機であったが、身延山側の遁辞によってその望みも消えた。⁽⁴⁵⁾ だから、和解した後、再開された団参に変化が生じるのは当然である。

身延山との半年にわたる紛争は、佼成会に団参を見直す機会を与えた。身延山団参に対する熱っぽいが冷めたことから、団参一般を冷静に客観的にとらえなおすことが可能になった。佼成会は霊山

信仰と結びついた日蓮への帰依から、素朴で即自的な団参観をもって来たが、今回の事件によってそうした観念を根本的に問い直し、いわば対自的な団参観への切り換えが可能となったのである。

佼成会の「醒めた」団参観は、『交成』誌（昭27・4）に掲載された「なぜ霊跡参拝をするのでしようか」と題する問答形式の文章に示されている。

問 立正佼成会では、毎年身延山や小湊・清澄山などの霊跡参拝を行うので、「佼成会は日蓮宗だから本山へお詣りするのだから」などと言う人があるようですが。

答 法華経を唱え日蓮大聖人の教えを信奉しているので、日蓮宗の一派だろうと言うのでしようが、佼成会はもとと在家仏教としての独立教団なので、どここの宗派にも属してはいないのです。無論、会長先生も副会長先生も僧籍はありません。

問 せっかく参拝に行っても、お開帳を受けないのは変だと思いませんか。

答 今までお開帳を受けたのは、両先生のお心にそってお寺に対する協力の一端なのです。佼成会の団体参拝は、身延のお寺や小湊誕生寺、あるいは清澄寺などへ詣ってお開帳を受けるのが目的ではないのです。佼成会では仏像や仏画などはお祀りしてありません。日蓮聖人が御本尊として示された十界の曼陀羅を私たちの心の中心として、法華経を行いに現わして身で読ませて戴い

ているのですから、仏像を拜ませてやらんと言われても、佼成会では別に驚かないわけです。

問 佼成会で修行参拝というのはどういうわけですか。

答 霊跡にお詣りするというだけでは何んにもならないのであって、お題目を高唱しながらの行進中にも、宿泊の旅館に於ても、また往き帰りの列車の中、バスの中、すべてが「是即道場」という心構えで、油断のない心、何か得ようとする心を保ち、始めは窮屈だナァと思うほどの「行」のうちに、自分が自分かと思う「我」を捨てた異体同心の気持に溶けこむことができる。これが佼成会独特の修行参拝なのです。道場での常日頃の厳しい教えの有難さを、こんなにハッキリと見せて戴ける修行はないと思います。ですから支部長さんや幹部さんたちが、無理にでもお山参拝に参加させようとして、一生懸命になって下さるのです。⁽⁴⁶⁾

開帳を受けるのは寺に対する協力的一端であり、開帳せぬと言われても佼成会として別に困りはしない、と断言しているが、あなたがち佼成会の強がりというよりは、むしろ真相に近いとみなしうる。一万人を超える大参拝団が納める開帳料・賽銭の額は、莫大なものであるからである。佼成会は団参を会員修行の場として活用したが、実は団参自体がすでに寺に対する協力であったと考えられるのである。小湊誕生寺の例であるが、年に一度の誕生会大法要にさいし、佼成会では大挙して参列するの

に、一般信徒の姿は三、四十名を出ない寥々たる有様であった。⁽⁴⁷⁾ 佼成会の団参によって活性化される法会であったことは、誕生会だけでなく、佼成会の団参対象にほぼ共通する現象ではなかったかと思われる。

昭和二十八年にも各地へ団参がくり出された。しかし、これにはさきにもた変化の萌しがみえていた。変化の芽はふくらみつつあった。それでもなお二十八年は、初期団参の姿を示す最後の年であった。その姿を、この年六月、労働基準法の適用に伴って出現した官僚制的事務機構の一部局、総務部企画課団参係が体系的な文章に表現している。「団参部行事企画要領並に事務処理要項⁽⁴⁸⁾」と題する文書である。佼成会の初期団参の性格をよく現わしているので、つぎにその要点をまとめておこう。

1 佼成会の団参は、日蓮縁りの遺跡に対する修行参拝である。

2 定期団参対象は、身延山方面（初詣・秋季参拝、誕生寺方面（誕生会・春季参拝）、円実寺（盆施餓鬼会）、龍口寺（法難会）、北山本門寺（お会）である。ここ三〜四年間の団参経験を二十八年の秋頃総括したものといえる。なお、二十六年開設の佼成霊園への盆・両彼岸の団参が含まれているのが注目される。

3 団参人数は、交通および宿泊機関の収容能力によって規定されるが、基本的には教団の参拝方針によってきめられ、各支部に対して会員世帯数に応じて割当てられる。したがって団参は動員によるものであった。

4 団参の単位である組(貸切りの一臨時列車に乘車)、組の単位である班(一旅館に合宿)の編成は、支部および支部内の系統を単位としてなされる。したがって、列車は動く道場、旅館は臨時の道場となり、組長・班長の権威的統制は、強いられた服従によってではなく、自発的追隨によって裏うちされる。ここに、割当てによる動員を、自発的修行参拝に転化させる契機が潜んでいる。

5 どの組も本部御旗を捧持して団参することは、対内的には動く本尊の下に修行させ、結束させる機能を、対外的には示威の機能をもつものである。

6 団参は独立採算制を原則とする。教団から団参関係人件費を補填し、また不足額の補助をするとはあっても、剰余金の教団会計への繰入れはしない。つまり、二十三年の身延団参の時に、いわば興行成績を挙げて道場建設費の不足分を捻出する、といった資金調達の具にしない。参加会費を納めて参加しなかった者には会費を返戻し、その他運賃が要らなかった者にはその分を払戻す。全体として剰余金が生ずれば参加者に割戻す。しかも端銭は円単位に切り上げて返戻するのである。したがって、参加者は全くの実費負担であり、端銭分の補助さえ潜在している。この会費精算方式は、割当て動員を自発的修行参拝に変えるもう一つの契機を提供するものである。

右の「行事企画要領並に事務処理要項」がまとめられた直後、佼成会の団参は大きな変化を示した。

まず、本部事務機構では、二十八年十一月の機構改革により、企画課団参係が廃止となり、業務は企画係に吸収されたようである。その意図は、二十九年からの定期団参行事の縮小となって現われた。前掲「要領並に要項」が掲げた一〇の行事のうち、佼成霊園関係を除く七行事から、身延山関係の二つの団参と、二十七年に一度実施しただけの北山本門寺お会式団参が落ち、誕生寺関係の二つの団参と、波木井山円実寺・龍口寺への団参の計四つだけが残された。しかもせいぜい一泊二日の団参となり、二泊三日以上のもは姿を消した。そういう形で二十九・三十・三十一の三ヵ年実施されるが、動員規模の大きい誕生寺・清澄山への春季参拝と龍口寺法難会団参は、その規模が絞られてゆく。十二年には妙佼副会長の遷化により中止された龍口寺法難会団参が、中止されたまま復興されることはなかった。三十三年には、五年ぶりに身延山・七面山参拝が復活するが、その代りに誕生寺・清澄山団参が落ち、三十四年以降は円実寺の盆施餓鬼会団参だけになってしまふのである。円実寺は身延支部のあるところ、施設と行事は教団外のものであるが、人的側面では教団内といってもよい。そうした円実寺だけが定例の団参対象として残った。団参の柱であった身延山方面は二十八年でほぼ終り、代って柱となった誕生寺方面も動員規模を絞りつつ三十三年で全く終りを告げる。もっとも、「要領並に要項」が予定表に掲げた佼成霊園への団参は残り、さしあたりそこに重点が移されていったのである。

五 教団内聖地の確立

教団内聖地とは、いうまでもなく、佼成会の本尊を奉祀する本部拝殿を中心とした、東京都杉並区和田本町の一郭である。昭和十七年建立の拝殿と二十四年建設の道場では収容しきれぬほど、毎日の参拝があつた。ことに、五日、十五日、二十八日の月三日の本部命日となると、何万という数の参拝者で、建物はもとより境内も埋まつたのである。二十六年十二月から翌年七月まで、命日参拝の人員調査が行なわれたので、それによつて表2を作成した。雪の日や雨の日でも二万人を越え、そうでなければまず三万人を突破する群参だつた。⁽⁴⁹⁾その点からみても聖地であるが、いわば日常的聖地にすぎなかつた。常ならぬ聖地にはほど遠く、そして展開される宗教活動もいわば日常的であつて、年中行事的な特殊法会のような儀礼は未発達だつた。そこで「お山」へ団参し、また日蓮縁りの、音に聞えた法会には団参を送り出したのである。

本部中心の年中行事の発達において、まず注目すべきは、十月十三日のお会式である。二十四年・二十五年にみるように、最初は近在の堀ノ内妙法寺のお会式に参加する形をとつた。ところが、二十六年初めて佼成会本部のお会式を十月十二日に挙行し、妙法寺へは翌十三日日本部特別班八〇余名による代表参拝ですませた。最初の本部中心のお会式行事はつぎのように描写されている。

新宗教における教団内聖地の確立過程

表2 命日における本部参拝者数

	本部拝殿	道場	備考
昭26.12. 5	19,561人	12,191人	水, 晴
15	19,368	11,930	土, 晴
28	—	—	金, 晴
昭27. 1. 5	25,415	17,101	土, 晴, 初詣り
15	24,914	13,612	火, 晴
28	20,199	12,346	月, 晴
2. 5	17,722	10,463	火, 晴
15	14,639	8,376	金, 雪
28	14,457	9,832	木, 曇
3. 5	—	—	水, 曇, 創立15周年記念式典
15	64,367	39,165	土, 晴, 朝日ニュース映画撮影
28	20,217	12,332	金, 晴
4. 5	21,000	13,259	土, 晴
15	12,717	7,452	火, 雨
28	24,598	14,485	月, 晴, 日蓮開教700年記念講演会
5. 5	24,200	13,654	月, 雨のうち晴
15	22,073	12,514	木, 晴
28	20,723	11,314	水, 晴
6. 5	24,407	14,201	木, 晴
15	33,263	17,610	日, 曇
28	20,949	12,277	土, 晴
7. 5	22,088	14,547	土, 晴
15	22,954	12,318	火, 晴
28	20,178	12,917	月, 晴

資料：『日報観』

去る十月十二日の佼成会のお会式行事は、各支部を八組に編成し、これを新宿・渋谷・荻窪・中野等八方面に集結、逐次本部に向って行進した大行列は、夕刻四時半頃より続々と本部に到着、七時半より八時頃は、その賑いも最高潮に達し、本部並びに修養道場の周辺一帯の地は、一天四海、皆婦妙法の太鼓の響きと、そして粹を競う五十余本の万燈で、文字通り灯の海の観を呈した。⁵⁰⁾

翌二十七年には、万燈が七一本にふえ、前年よりもさらに規模の大きいお会式が十月十二、十三の二日にわたって挙行されたが、もはや妙法寺への行進はみられず、前年から始まった「お山」(妙俊邸)への行進が全くこれにとって代ったのである。お会式行事の本部関係への集中は、教団外聖地への団参を教団内聖地への団参に切り換えてゆく歩みの、魁であった。

団参対象を教団内へと切り換えるためには、教団内聖地、あるいは聖なる行事の成立が前提である。本部お会式をそのような行事として位置づけることができる。本部以外の教団内聖地としては、前掲の企画課団参係の文書「要領並に要項」に登場した佼成靈園に指を屈しなければならぬ。

佼成靈園はもともと、①せつかく佼成会の信者となっても、墓地の関係で今までの寺から離れられない会員がいる、②従来の墓地料は高すぎる、など会員の悩みを解決するために構想され、都下東大和市の南西角に当初六、五七一坪の土地をえて、二十六年五月に開園されたものである。二十七年一月、旧本部拜殿を移築した礼拝堂が落成し、あわせて無縁供養塔の除幕式が挙行されたのに加えて、

会長副会長の予定墓地も竣工した。また、度重なる地積拡張により、約三万坪の大霊園となった。會員のうち希望者のための霊園ではあるが、こうして教団自体の聖地としての属性を蓄積させていったのである。⁽⁵⁾

二十七年の春彼岸は、誕生寺・清澄山への日蓮開教七百年記念参拝と時期的に重なったために、倭成霊園への参拝バスを利用する會員はさほど多くなかった。しかし盆参拝には延三二台のバスが参拝者を霊園へ運び、秋彼岸には延六四台のバスで四千人を越える参拝者が霊園を訪れた。二十八年には霊園参拝がさらに大規模となり、春彼岸には五千余人（バス九〇余台）、盆には五千三百人（バス九三台）、秋彼岸には実に一万三千人（バス二三八台）と、早くも定期行事として定着の趣きがあるのである。この頃、身延山との紛争を契機に団参の根本の見直しが始まっていた。それを反映して、団参係による二十八年の定期団参行事予定表は、年三回の倭成霊園参拝を他の霊跡団参と並べて掲げ、さらに、二十九年以降団参対象が大幅に整理されたなかにあつて、霊園団参は生き残ったのである。のみならず、二十九年から身延山初詣りが中止された代りにか、霊園が初詣りの対象となり、二十九年には一万五千人、三十年には一万人の団参をみている。その後、本部が初詣り対象の観を呈する年もあり、二十五年から始まった三月の教団創立式典、二十六年からの十月の本部お会式といった、本部中心の年中行事の一環を形成してゆく。しかし、霊園としての重要性は毫も損じたのではなく、三十二年九月の妙佼遷化に続く霊園への納骨によって、霊園の聖性はさらに強められたのであった。

表 3 教団内聖地への団参

年次	対 象	名 称	期 間	総 人 数	備 考	典 拠
昭和26年	本部	お会式	10月12～13日	約12,000人	万燈50余本	『日報』『交成』
27年	佼成靈園	彼岸参拝	3月18～24日	バス32台	万燈71本	『日報』 —
	佼成靈園	お盆参拝	7月13～16日	4,084人、バス64台		『日報』『交成』
	佼成靈園 本 部	彼岸参拝 お会式	9月20～26日 10月12～13日	約33,000人		『日報』『交成』
28年	佼成靈園	彼岸参拝	3月18～24日	5,000余人、バス90余	万燈71本	『日報』『交成』
	佼成靈園	お盆参拝	7月13～16日	5,300人、バス93台		『日報』『交成』
	佼成靈園 本 部	彼岸参拝 お会式	9月20～26日 10月12～13日	13,000人、バス238台 (参拝18万人)		『日報』『交成』
29年	佼成靈園	初詣り	1月8～18日	15,000人、300台	(万燈102本)	『日報』『交成』
	佼成靈園	彼岸参拝	3月18～24日	12,000人、210台		『日報』 —
	佼成靈園	お盆参拝	7月13～16日	8,100人、170台		『日報』『交成』
30年	佼成靈園 本 部	彼岸参拝 お会式	9月20～26日 10月12～13日	(10,791人参加)	万燈71本	『日報』『交成』
	佼成靈園 本 部	初詣り 彼岸参拝 創立記念祝典	1月7～11日 3月18～22日 4月4～5日	10,000人、160台 6,000人、115台 26,950人、877台		『日報』『交成』 『日報』『交成』 『年鑑』

新宗教における教団内聖地の確立過程

31年	本 部 校成靈園 校成靈園 校成靈園 本 部	お盆参拝 彼岸参拝 お会式	7月13～16日 9月21～27日 10月12～13日	3,222人, 71台 3,250人 14,201人参加, 参拝38万人	万燈119本纏8本	『日報』 — 『日報』 『交成』
	初詣式典 創立記念式典	1月5日 3月5日	10万人, 210台 5万数千, 百數十台 (3,083人)	開都500年祭をか ねる	『日報』 『交成』 『日報』 — 『日報』 『交成』 『日報』 『年鑑』	
	彼岸参拝 お盆参拝 彼岸参拝 お会式	3月18～24日 3月18～24日 7月13～16日 9月20～26日 10月12～13日	3,300人, 66台 3,206人, 67台 (16,000人)			
彼岸参拝 創立記念祝典	3月18～24日 4月4～8日	3,503人, 73台 (5日間で14万人)				
32年	本 部 校成靈園 校成靈園 校成靈園 本 部	お盆参拝 彼岸参拝 お会式 妙俊49日 会長誕生会	7月13～16日 9月20～26日 10月12日 10月28日～ 11月5日 11月15日	(3,300人) (6,050人) 6,000人, 122台	行列の代りに読経	『日報』 『年鑑』 『日報』 『交成』 『日報』 『交成』 『日報』 『交成』
	初詣り 創立記念式典 彼岸参拝	1月7～10日 3月5日 3月18～24日	19,000人 20,000人, 85台			
33年	校成靈園 本 部 校成靈園	初詣り 創立記念式典 彼岸参拝	1月7～10日 3月5日 3月18～24日	19,000人 20,000人, 85台		『日報』 『年鑑』 『日報』 『交成』 『日報』 『年鑑』

年次	対象	名称	期間	総人数	備考	拠
33年	佼成霊園	お盆参拜	7月13～16日	14,000人	妙佼初盆 建墓式は10日	『日報』『交成』 『日報』『交成』 『年鑑』 『日報』『交成』 『日報』『交成』
	佼成霊園	妙佼一周忌	9月10～18日			
	佼成霊園	彼岸参拜	9月20～26日			
	本部	お会式	10月12日		在京支那のみ	
	本部	会長誕生会	11月15日			

このようにして、波木井山円実寺を除く教団外聖地団参中止直前の三十三年には、教団内聖地と聖なるイベントの原型が全く出揃っているのを確認することができるのである。すなわち、本部へは初詣り、創立記念式典あるいは祝典、お会式、それにこの年から十一月の会長誕生会が加わった。佼成霊園へは、(初詣り)・春彼岸、盆・秋彼岸、それに妙佼命日の団参がある。季節的にみれば、創立記念日、春彼岸、創立記念祝典と続く三～四月に、そして妙佼命日・秋彼岸・お会式と続く九～十月に、地方から東京の本部・霊園へと、団参の大きな流れが集まったのである。

佼成会では三十一年一月、本部大拝殿(大聖堂)の建立が決定され、佼成学園の北に連なる和田本町の高台に、鉄筋コンクリート五階または六階建て、延四千坪程度の大殿堂を建てることになった。⁽⁵²⁾ 工事は「読売事件」、そして「連判状事件」という、三十一年次の佼成教団を大きく揺がしたきびし

い試練の連続によって大幅に遅れ、本格化したのは同年の秋頃からであった。しかし、教団首脳は建設資金の蓄積が思うにまかせないことに苦慮し、一つの対策として会員に消費を強いる行事の廃止を思いついた。かくして三十三年から、十月の本部お会式を在京支部だけで簡素に実施し、地方支部はそれぞれの支部道場でお会式を行なうことに改め、三十四年には、すでに述べた波木井山の川施餓鬼会団参を除く一切の団参を中止し、本部への団参に一本化したのである。⁽³⁴⁾

昭和三十四年三月二十五日付の『交成新聞』は、「お山参拝は当分中止、春秋二回、本部を中心に」団参が動員されることを報じた。春とは三月五日の創立記念日、秋とは九月十日の妙佼命日に照準するものである。三十四年の春季団参は三月一日から四月二十九日まで、つまり創立記念式典および祝典、靈園春彼岸のイベントを含む期間にわたり、秋季団参は九・十の二ヵ月をおおい、妙佼年忌・秋彼岸・お会式のイベントによって点綴されていた。初の試みである春季団参には全国から約二万五千の会員が参加し、各組ともだいたい滞在五日間の日程で、建設中の大聖堂はじめ各施設見学、靈園参拝、会長説法聴聞、夜はスライド映写会出席といった盛りだくさんなスケジュールをこなした。⁽³⁵⁾本部では団参送出席要員がいらなくなった代りに、団参受け入れ業務が集中したのである。

本部中心の団参への切り換えについて、庭野は『自伝』のなかで、

後年、会員が数十万という数になり、しかも信者が全国に分布するようになったので、そうい

う形のお山参拝は不可能になり、本部中心の団参に切りかえた。⁽⁵⁶⁾

と述べている。佼成会の側からすれば、お山参拝の最大規模は二万人であるから、東京およびその近県に信者が集中する会員総数約一〇万世帯以下の時代に、適合した団参だったことは確かである。佼成会にとって、そのような時代は昭和二十六年——会員九万二千世帯。東京およびその近県に会員の約九割が集中——までで、二十七年以後は、団参の編成にもまた参加にも漸く困難が加わっていったことと推測される。団参を年四回に絞る前年の二十八年には、それぞれ一九万二千世帯、八割弱、そして年一回に絞りきる前年の三十三年には、それぞれ三八万六千世帯、五割強となっている。三十三年の状態では、教団として団参を編成するためのコストが、今や看過できぬものになっていたと考えられるのである。

本部中心の団参への切り換えは、しかし、会員数や会員分布の函数ではなかった。先述のように、それには、身延山との紛争を契機とする団参見直しという誘因と、大聖堂建設費捻出のための経費節約というきつかけ要因が必要だった。そればかりではない。佼成教団における日蓮遺跡の位置づけの変化、それを導き出した祖師日蓮の位置づけの変化という、教義的要因も、団参の変質に深くかかわっていたとみることができるのである。

昭和二十七年一月に施行された「立正交成会教規」は、第一章総則において、

第一条（伝統） 立正交成会は久遠実成本師釈迦牟尼仏出世の本懐である法華経を末法に弘通することを付嘱された本化上行菩薩の応現日蓮聖人が開創唱導された真実の仏法を開闡する仏教正統の宗教団体である。

第二条（教義） 立正交成会は法華三部経を所依の經典とし、日蓮聖人の教旨を奉じ、大曼陀羅を奉祀し、（下略）

と定めている。佼成会は日蓮を祖師とし大曼荼羅を奉祀する仏教団体であることは明らかである。だから、日蓮門下協議会に参加したのであり、身延山ほか日蓮縁りの遺跡に年々いく度も団参を送ったのである。ところが、「教規」に代えて三十五年九月に施行された「立正佼成会会規」は、第一章総則において、

第一条 立正佼成会は、久遠実成大恩教主釈迦牟尼仏を本尊とする。

2日蓮聖人図願の大曼荼羅（マテ）をも奉祀する。

第二条 立正佼成会は、法華三部経を所依の經典とする。

と改めている。佼成会は日蓮図願の大曼荼羅を併祀の地位に下げ、代って釈迦牟尼仏を本尊と定め、

日蓮の教旨を奉ずる日蓮系教団から、法華經の信解に立って菩薩道の実践を本義とする根本仏教志向教団へと脱皮したことが、ここに示されている。この転身は佼成教団史を画する、三十三年年頭の「眞実顯現」の宣言を機とするものであった。⁽⁵⁷⁾ こうして、日蓮遺跡への団参を本部中心の団参に切り換える、教義的思想的準備が整ったのである。しかしその実施は、大聖堂建立のための冗費節約という、さし迫った必要を契機としなければならなかった。

ここで注意しておきたいのは、「お山参拝」が三十三年をもって跡を絶ったわけではないことである。現に、三十六年五月二十六日から六月十一日まで、五組を編成して二泊三日の七面山修行参拝を実施し、三十七年十月十八日から十一月一日まで、七組の編成で身延・七面山秋季団参を行ない、三十八年十月十九日から十一月一日まで前年同様の参拝団を送り、三十九年十一月四日、五日には身延思親園団参を実施している。つまり三十六年からは毎年一回、だいたい秋季団参をくり出しているのである。しかし三十三年以前と異なる様相を二点について指摘することができる。第一は、日蓮聖跡というよりは、七面山・思親園といった靈山への登拝に力点が置かれていることである。東京の住宅地の一郭にある佼成会本部では、「お山」がもつ靈性に欠けている。その意味で「お山参拝」が復興されるのは無理がないといえよう。第二は、かつてのような会長副会長が率いる会を挙げての団参でなく、本部職員・在京二八支部・青年部など、教団としては一部の会員による団参であることである。⁽⁵⁸⁾ 佼成会では、昭和三十四年十一月から翌三十五年五月にかけて、支部構成の原理を導き系統制から地

区最寄り制に改革し、ブロック制なる新制度を実施した。これによって、在京支部とは支部の本拠が東京にあるだけでなく、支部の会員も東京の一定地区に限定されるものとなった。ブロック制以前の在京支部は、地方にも多数の会員を擁した。例えば、昭和三十三年には、在京支部をつかめば過半の会員が芋蔓式に掌握された。しかし三十五年末にはブロック制による在京支部でつかみうる会員は四分の一にとどまったのである。在京支部は本部道場を修行の場とするので、相互に連絡もとりやすく統一行動もしやすい。また青年部は最も行動的で動員もしやすい。三十六年以降毎年一回実施された団参は、会員のうち最も組織しやすい一部の人々によって実施されたものである。この点でも、昔日の団参と同日の談ではなかった。また、一組の人数が多くないので、バス数台を連ねての団参であることも、新たな様相といえるかもしれない。

他方、大聖堂は実に八年の歳月を費して、昭和三十九年五月に落成した。五月十五日の落成式は、旧本部を出発した全国一七三支部の御旗、ついで本部御旗が大聖堂に入場し、定位置に安置されることで開幕した。御旗の遷座は、本部拜殿の機能が大聖堂に移されたことを象徴するものにほかならなかった。開幕より一瞬早く、聖壇のどん帳があがって、金色五彩、三・二一メートルの立像の本尊、久遠実成大恩教主釈迦牟尼仏が全容をあらわした。佼成会無二の聖域、大聖堂の出現である。⁽⁵⁹⁾

大聖堂が落成すると、大聖堂への団参が信者育成上重視されるのは当然である。⁽⁶⁰⁾ 例えば昭和四十一年度の布教活動方針の一つとして、「大聖堂を中心とする全会員の修行体勢を確立しよう」というス

ローガンのもとに団参の強化が提唱され、落成記念の見学的団参から練成団参へと、次第に体勢を強化し、本質的な修行団参へ向上させることが課題として指摘されている。⁽⁶¹⁾

団参の強化は、宿泊・研修施設の整備を促す。宿泊施設としては昭和二十八年建設の第一佼成寮があったが、収容能力は百数十人のごくごく限られたものであった。大聖堂建設過程ですでに団参を本部に一本化する方針が採用されたが、隘路は宿泊施設の不備であった。そこで三十九年に第二道場を増築して地方団参宿泊施設とすることになり、凡そ六百人を収容しうる建物が同年中に完成した。しかし、それでも新旧あわせて一千人ぐらしか収容できず、諸設備も整っていなかった。そこで四十三年年頭に、二千人の収容能力をもつ団参会館の建設に着工したのである。また研修施設として、都下青梅市に青年練成道場を昭和四十一年に完成させ、また四十二年、大聖堂隣接地に普門館の建設に着工した。このようにして、大聖堂を中心とする団参により、組織的にかつ集中的に信者を育成することのできる体勢を整えていったのである。四十三年段階の実情については、団参には①記念団参(創立記念日、会長誕生会)と②階層別練成団参とが区別されている。後者は主任・組長・班長、一般・青年・壮年の、役職・性年齢階層別に、一泊二日ないし二泊三日の日程で行なわれ、参加者は、読誦修行・体験説法・会長法話・交流法座・教学研修会・当番修行・法座修行などの練成を受けたのである。⁽⁶²⁾

昭和四十一年以降、教団として日蓮聖跡への団参を組織することはほぼなくなった。七面山・思親

関参拝、龍口寺法難会参加、池上本門寺お会式参加等は、各支部あるいは支部の地域的包括体である教会が企画し、実施するものとなった。⁽⁶³⁾もし教団が企画するとすれば、三十九年末に会長ほか有志が参加したインド仏跡参拝のようなもののほうが、より似つかわしい段階に入ったのである。

六 総括

いま、聖地団参を第一次的目的の差によって、修行団参、記念団参、観光団参の三つに分け、根本聖地・イベント聖地・巡礼聖地の三区分と対応させると、図2のようにまとめることができよう。◎印は佼成会の場合である。身延山のような根本聖地に対しては、修行団参が本来的であるが、入山会などイベントのさいに記念団参をするだけとなったり、龍口寺などのイベント聖地に対しては、記念団参が本来のものであるが、観光団参になることもある。図2でいえば、左の欄から右の方へ移動することによって、おおむね世俗化を示すといつてよいだろう。逆に、右から左へ移動したとすれば、背景に信仰復興を想定することができる。

佐渡のような巡礼聖地は、佼成会にとって付随的なものにすぎないので、これを別として、根本聖地とイベント聖地に限っていえば、昭和二十四～五年段階から三十九年段階への推移を、図3のように総括することができよう。佼成会の初期団参の概要を示す昭和二十四～五年段階では、教団内聖地

図 2

	←信仰		観光→
	修行団参	記念団参	観光団参
根本聖地	◎	○	○
イベント聖地 巡礼聖地	○	◎	◎
	←信仰復興 世俗化→		

はまだ十分に発達しておらず、教団外聖地に依存していた。しかし、一つには根本聖地である身延山との紛争を契機とし、二つには根本聖地たるべき大聖堂の建立により、教団外聖地への依存を脱したのであった。それは、教団としてのセルフ・アイデンティティ確立の一表現にほかならなかった。そしてこの過程は、本部お会式にみられるように、イベント聖地の確立が先行し、根本聖地の確立にはなお多くの年月を要したのである。

最後に、コムニタス経験との関連でいえば、遠隔地にある巡礼聖地へは、ふだん使用しない交通機関の組合せによって到達することから、いわば移動効果が参拝者を日常から非日常の世界へ引き入れ、コムニタス経験をえさせる。それに対して、根本聖地は遠隔地にあることもあるが、ふだん使用しない交通機関を一種類使用すれば到達しうる程度の近さでも、山とか大伽藍とかの、いわば環境効果によって、コムニタス経験をえることを助けるのである。また、イベント聖地は、地理的に最も近い聖地であるが、イベントのつくりだす非日常的な状況、いわばイベント効果によって、コムニタス経験に参拝者を導く。これら三種の聖地には、三種の効果の一つがそれぞれ結合するというよりは、二種以上の効果が重なりうるけれども、右のように概括することができるのである。

図 3

	昭和24～25年段階→昭和39年以後			
	教団内	教団外	教団内	教団外
根本聖地	○	○	○	○
イベント聖地	○	○	○	○

佼成会の根本聖地たる大聖堂およびその周辺に、山岳や森林はないが、その代りに建造物の荘嚴秀麗さが環境効果を発揮している。さらに、昭和五十三年九月に練成道場が落成した山懐の会長生誕地、新潟県十日町市菅沼も聖地とされ、佼成会聖地の自然環境面を補強していることを、付言しておく。

注

- (1) 星野英紀『巡礼——聖と俗の現象学——』講談社現代新書、昭和五六年、四頁、一二八～一三四頁。
- (2) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、昭和三九年。
- (3) 星野『巡礼』、二八～二九頁。
- (4) 星野『巡礼』一九～二〇頁、一三〇頁、一三六頁、一三八～一四二頁。
- (5) 星野『巡礼』二五～二六頁、三六頁、七七頁、九六頁、九七頁、一〇一頁、一〇四頁、一一五頁。
- (6) 立正佼成会編『庭野日敬法話選集・年譜』佼成出版社、昭和四四年、一三頁。佼成出版社編『法輪讃歌』佼成出版社、昭和五三年、九二～九三頁。
- (7) 身延・七面山のこと。のちに団参の重点が誕生寺・清澄山へ移ると、それを指し、さらに、生仏視された妙佼副会長の、和田本町の高台に昭和二十六年に新築された邸宅をも指した。
- (8) 佼成会用語の一つ。不心得の行動があったことを指摘し、心を改めることを迫る現証。当人が望まぬ、

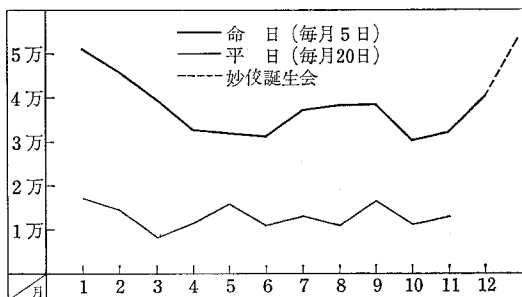
不本意な出来事の形をとる。

- (9) 庭野日敬『庭野日教自伝』佼成出版社、昭和五二年、一九九～二〇〇頁、二〇四頁。
- (10) 庭野『自伝』二〇四頁。
- (11) 庭野『自伝』二〇二頁。『法輪讃歌』九六～九七頁。
- (12) 『法輪讃歌』二二頁。
- (13) 『庭野日教法話選集2』佼成出版社、昭和五五年、五五～五六頁。
- (14) 庭野『自伝』二〇四～二〇五頁。
- (15) 庭野『自伝』二〇二頁。
- (16) 『交成』昭25・10月号、四九頁。
- (17) 『交成』昭25・11月号、三三頁。
- (18) 『交成』昭27・8月号、七二頁。同昭28・9月号、七二頁。
- (19) 『交成』昭28・7月号、三八～四五頁。
- (20) この場合の巡礼は、星野のいう巡礼より狭義のもので、霊跡めぐりを意味する日用語と同義である。
- (21) 昭24・10・3付、「万燈携帶普道路通行許可願」(佼成教団史資料第一四三号)
- (22) 蘭田稔「祭りの喪失と復権」『現代人の生活拠点』(ジュリスト総合特集No.18) 有斐閣、昭和五五年、九二頁。
- (23) 久保角太郎は、大正十三年から身延・七面山に年に何回となく参拝したという(小谷喜美『私の修行生活三十五年』霊友会教団、昭和三三年、一一一頁)。
- (24) 庭野『自伝』二七二～二七三頁。
- (25) 『日報』昭23・8・21～23。
- (26) 庭野日敬「創立十五周年を迎えて」『交成』昭27・3月号、八～二二頁。

新宗教における教団内聖地の確立過程

- (27) 『新宗教新聞』昭27・6・25付一面。
- (28) 庭野『自伝』二七三〜二七五頁。日朝は身延山十一世、中興の祖。
- (29) 『日報』昭23・12・4、6。
- (30) 『交成』昭25・8月号、一六〜一七頁。
- (31) 『交成』昭25・9月号、三〇〜三一頁。
- (32) 従来の諒承では団参一組につき三万円。これに対して要求は一人百円であった。二十六年の秋季団参は二六組編成であったから、メて七八万円、しかるに要求によれば一万三千人に対し一三〇万円、倍近い増額要求であったのである。『新宗教新聞』昭27・6・25日付一面をみよ。
- (33) 『山梨日日新聞』昭27・1・23付、2・23付。『交成』昭27・3月号、一一頁、同27・4月号、四二頁。
- (34) 『交成』昭26・9月号、四九頁。
- (35) 庭野「創立十五周年を迎えて」『交成』昭27・3月号、八〜一三頁。『日報』昭27・1・7、1・15。
- (36) 『山梨日日新聞』昭27・1・23付二面。『交成』昭27・2月号、七六頁。『新宗教新聞』昭27・6・25付一面。庭野『自伝』二七五頁。
- (37) 『山梨日日新聞』昭27・1・23付二面。
- (38) 『山梨日日新聞』昭27・3・21付。
- (39) 『新宗教新聞』昭27・6・25付一面。

図4 本部参拝人員（昭和32年）



資料：昭和32年版『交成年鑑』41頁。

- (40) 『新宗教新聞』昭27・6・25付一面。
- (41) 『山梨日日新聞』昭27・3・21付。
- (42) 『日報』昭27・2・9。庭野『自伝』三七五頁。
- (43) 『交成』昭27・7月号、一五頁。『新宗教新聞』昭27・6・25付一面。
- (44) 『新宗教新聞』昭27・6・25付一面。
- (45) 庭野「創立十五周年を迎えて」『交成』昭27・3月号、八〜一二頁。
- (46) 『交成』昭27・4月号、四二〜四四頁。
- (47) 『交成』昭30・3月号、五五〜五六頁。
- (48) 佼成教団史資料第七三八号。
- (49) 昭和三十一年次の調査によると、命日（ただし五日のみ）参拝の一日平均は三二、二八六人、それに対して平日（ただし二十日のみ）参拝の一日平均は二〇、五七二人であった。なお、図4をみよ。
- (50) 『交成』昭26・11月号、四八頁。
- (51) 森岡清美「佼成教団の成立過程——昭和二十年代の立正佼成会（二）——」立正佼成会教団史研究室編『佼成教団史の研究』中央學術研究所、昭和五五年、六二〜六四頁。
- (52) 森岡清美「政教分離体制下における宗教弾圧——立正佼成会の『読売事件』について——」『日本常民文化紀要』第七号（昭56・3）一九頁。
- (53) 『交成』昭33・10月号、一〇六頁。
- (54) 立正佼成会第一六六回理事會議事録（昭33・12・14）。
- (55) 『交成新聞』昭34・5・15付二面。
- (56) 庭野『自伝』二〇五頁。
- (57) 庭野日敬「神示に基いた交成会の御本尊勧請の経緯」『交成』昭32・12月号、一六〜二二頁。庭野「真

実顕現の年を迎えて」『交成新聞』昭33・1・5付一面。

(58) 『佼成』昭37・11月号、一〇七頁。『佼成』昭38・11月号、一〇七頁。

(59) 大聖堂建立の詳細については、森岡の別稿「新宗教における根本聖堂の建立」『日本常民文化紀要』第八輯（田中克己教授退任記念）（昭57・3）、一三三～一八二頁。

(60) 立正佼成会『教団運営の基本的問題に関する答申』昭和三八年（贍写）、七二～七三頁。

(61) 「昭和四十一年度布教活動方針」（佼成教団史資料第一五四号）。

(62) 昭和四四年版『佼成年鑑』一七八頁。

(63) 昭和四一年版『佼成年鑑』所収、昭和四十年の日誌。この年、東京教会所属二八支部による霊地団参は、小湊誕生寺四九四人、清澄山一九七一人、佐渡一五七人、波木井山五一〇人、七面山三〇四六人、思親閣二五八四人であった（『年鑑』三〇七頁）。なお、森岡克修は、佼成会の団参は①本部企画②支部企画・本部窓口③支部（教会）の自主的企画運営、と推移したと説いている（森岡「立正佼成会における団参について」『中央学術研究所紀要』第一〇号（昭56・7）、九三頁）。

支部の自主的な企画運営に対して、教団本部は黙認の態度をとっている。決して奨励されているのではないのに、東京の支部（教会）でもほぼ半数が実施しているのは、大聖堂団参では満たされない何かがあるからである。それは、根本聖地への団参に参加した信者が、身体的な修行によって味わり大宇宙との一体感、日蓮の原体験の追体験、救われたという実感である。昭和二十年代に何篇も記された。お山参拝で救われた体験」こそ、もぐりの形で七面山団参を維持させる力であろう。なお、討論「新宗教の諸問題」『新宗教の世界Ⅰ』大蔵出版、昭和五四年、二二六～二二七頁参照。